

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：37115

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24611032

研究課題名(和文)地域の景観を観光資源とした持続的なまちづくりに関する研究

研究課題名(英文) A study on the sustainable community development by making good use of historical townscapes and cultural landscapes as tourist attraction base

研究代表者

大森 洋子 (Omori, Yoko)

久留米工業大学・工学部・教授

研究者番号：30290828

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：地域の個性的な景観を保全し、それを活かした持続可能な地域開発型まちづくりの条件を事例から明らかにすることが研究の目的である。研究の結果以下の知見を得た。景観の価値を地域住民で共有し、それを維持し活用するための住民のまちづくり団体が必要であり、行政とのパートナーシップ構築も必要である。着地型観光はまちづくりに有効であり、まちづくりをコーディネートするプラットフォームが地域に存在することが重要である。町並みを維持する制度はあるが、農村景観に関しては農地を維持する補助がなく農家の存続が課題である。農業以外に副収入を得るための農家民宿等、観光が農業に果たす役割について研究を進めていく必要がある。

研究成果の概要(英文)：The study aims to make clear the conditions of the sustainable community development by making good use of historical townscapes and cultural landscapes as tourist attraction base from a case study. The results are as follows. (1) All members in local community understand the value of historical townscapes and cultural landscapes. (2) There are nonprofit organizations for the community development. (3) The partnership between the city administration and its residents is formed at the early stage of the community development. (4) There is a platform to coordinate a community-based tourism in local community.

研究分野：景観保全

キーワード：歴史的町並み 文化的景観 着地型観光 文化遺産保全 まちづくり団体 八女市 阿蘇地方

1. 研究開始当初の背景

日本の個性的な町並みや農村景観の多くが、高度経済成長期からバブル期にかけての都市開発や都市への人口流出により失われてきた中で、現在地方に残っている歴史的町並みや農漁村景観は、地域の個性を現す貴重な文化遺産である。しかし多くの資源が地域住民にも意識されず潜在している。また何らかの保全の措置が執られている資源もマネジメントが巧く行われず、また観光開発の方向性が見いだせず魅力のある観光地となり得ていない。このままでは多くの魅力的な景観が消滅してしまう危機にある。地方に残る景観を観光資源として地域振興を目指している地域においては、地域の景観資源を悉皆調査により把握し、その価値付けを行い、何らかの保全の措置を執り、文化遺産として情報発信し、それらの資源を保全しつつ訪問客を迎えるシステムづくりが必要である。

2. 研究の目的

地域の個性的な景観を保全しつつそれを活かした持続可能な地域開発型まちづくりの条件を事例から明らかにすることが研究の目的である。

3. 研究の方法

事例には中山間地の中心部に歴史的町並みが残りそれを活かしたまちづくりを志向している福岡県八女市と農村景観を維持している熊本県阿蘇地方、またその先行事例として観光地形成に一定の成果を上げている大分県日田市豆田町を比較対象として以下の枠組みで研究を行った。

景観の把握、景観を維持している地域の社会システムに関する分析、を現地踏査と関係者へのヒアリングにより行い、その成果を用いて景観を保全しながらのツーリズム開発の条件について考察を行った。

4. 研究成果

(1)八女市福島の景観とまちづくり

平成 14 年に重要伝統的建造物群保存地区(以下伝建地区)に選定された八女市福島地区は、歴史的建造物が集積し、伝建制度による伝統家屋の修理と平成 6 年開始の国土交通省の街なみ環境整備事業による修景事業を用いて、官民一体となって町並み保存を進めてきた。平成 26 年までに伝建制度により伝統家屋 79 棟と工作物 18 件の修理工事が実施されている。街なみ環境整備事業では町屋交流館整備、道路美化、ポケットパーク整備、街路灯整備、33 棟の家屋修理と 14 物件(家屋 6 棟、工作物 8 件)の修景事業が行われた。最近では歴史的町並みを見学に訪れる観光客の増加と共に、町並みを活かしたまちづくりを実施している先進地として視察に訪れる行政関係者も増えている。平成 25 年にはまちづくり活動を記録したドキュメンタリー映画「まちや紳士録」が完成し各地で自主上

映が行われている。福島の町並みのこれまでの取組経緯と保全状況及びそれを活かしたまちづくりのシステムを分析し、福島のまちづくりの特徴を明らかにした。

八女市の概要と八女福島の町並みの特徴

八女市は平成 22 年の近隣 2 町 2 村との合併後面積が 482.53km²となり、福岡県内 2 位となった。福島は市の西端の旧八女市の平野部に位置している。福島地区には 17 世紀初頭、城下町が築かれたが、十数年で廃城となり、城下町の構成を残しつつも在方町として発展した。八女福島伝建地区は、かつての城の南側を取りまくように走る旧往還道に沿って設定されており、主に江戸時代末期から明治時代にかけて建築された白壁土蔵造の入母屋 2 階建て妻入りの伝統町家が数多く残っている。保存計画では、519 件の伝統的建造物 133 件の環境物件が特定されている。こうした地勢と歴史を背景に、中世に起源を持つといわれる手漉き和紙、石灯籠、近世に始まる仏壇、提灯といった多様な手工業が産業基盤として発展し、今もなお伝統的町家を工場として受け継ぐものも多い。

イベントとまちづくり団体の誕生

修理事業により個性的な町並みが甦ることにより徐々に観光客が増え始めると、町並みが観光資源となることが認識され、おひな様を町家に飾る「ぼんぼり祭」が平成 8 年に誕生した。地域の伝統祭事には延享元年(1744 年)から続く重要無形民俗文化財である「燈籠人形」があり、これが奉納される秋の放生会の期間は昔から大勢の人が訪れていたが、その時期以外にも町並み見学に観光客が訪れることとなった。徐々に、伝統家屋を利用した店舗が増え、修理された空き家に住民が戻るなど、町が活性化してきている。

まちづくり団体の活動も活発で、町並み整備の推進を行う「町並み保存会」、伝統家屋の修理や新築修景の相談にのり設計を行う「NPO 八女町並みデザイン研究会」、ボランティアガイドの「町並みガイドの会」、イベントの企画・運営を行う「八女ふるさと塾」、空き家を所有者に代わって修理再生し賃貸する「町家再生応援団」、八女福島のまちづくり団体を束ねるような役割を果たしている「NPO 八女文化振興機構」などの多様な団体が協力体制を築いている。町並み保存のまちづくりにおいては、ハード面に関わる団体だけではなく、後継者育成や町並みの中でくり広げられる伝統祭事の開催等のソフト面に取り組む団体も、地域への愛着を育て良好なコミュニティを維持する上で重要である。それらのまちづくり団体が、町並み景観を維持するため様々な活動をおこなっているが、最も特徴的な団体は「町家再生応援団」である。

町家再生応援団の活動

町並み整備が開始された当時は、伝統家屋の空家が十数件あった。行政も住民も何らかの空家対策の必要性を認識し、平成 10 年頃より「空家活用検討委員会」を町並み保存会

の中に設置し、空家の現状把握と賃貸や売買の仲介に努めていた。しかし、空家の寄付の申し出があっても、市はそれを維持する余裕がないことから拒否せざるを得ず、何らかの民間組織の必要性が出てきた。そこで専門的に空家の保存活用を推進することを目的に平成 15 年に市民有志が集まり「町家再生応援団」が誕生し、翌年 NPO 法人を取得した。会では町並みの魅力と空家情報をインターネットで発信しながら遠隔地に住む所有者に連絡を取り賃貸や売買の仲介をする一方で、高齢で日常の手入れも困難になっている伝統家屋の軽微なメンテナンスをボランティアで行っている。このような活動により、空家がギャラリーや飲食店として再生活用されるようになった。この NPO のユニークな点は、会員を中心としてほかのまちづくり団体へ呼びかけ、有志を募り空家保存活用のための「町家保存機構」を物件ごとに発足させていることである。所有者が修理資金を負担することができない倒壊寸前の空家を再生するために、所有者と管理委託契約を結び、修理負担金を会員の有志から調達し保存機構が施主となり伝建制度の補助事業を活用し修理を行っている。また、リスクを軽減するため、修理事業の前に入居者を決め同機構への入会を勧め、修理の内部の設計に意見を反映できるようにしている。修理が済んだ空家を前述の入居者に賃貸し、その賃貸料を修理資金の提供会員に返却するシステムになっている。これにより 5 棟の倒壊寸前の空家が救われ、全棟が住宅や店舗として活用されている。この NPO の活動で空家の需要は徐々に増加しており、現在、十数人が順番待ちをしている程である。これらの活動に対して平成 26 年にサントリー地域文化賞が贈られた。たしている。

八女市福島のまちづくりの特徴

ソフト面や空家対策に関わるまちづくり団体は民間独自の団体であり、自立した運営を行っている。イベント開催時はこれらの団体が協力して実行委員会を組織している。また空家対策についても、先ず「再生応援団」が所有者と連絡を取り、賃貸や売買の要望が出れば「デザイン研究会」が家屋調査を行い修理費用の概算を出し、各まちづくり団体が協力して買い手や借り手を捜す。双方条件が折り合えば契約の仲介を「再生応援団」が行う。その後具体的な修理設計を新しい所有者や賃借人の要望に応じて「デザイン研究会」が行い、行政が伝建制度に基づいた修理費用の補助をする、といったネットワークが築かれている。

各まちづくり団体の会員は、福島町の町並みに魅力を感じる多彩な人材が集まっている。町並み保存に尽力する行政職員、その事業を運営する住民組織、それを技術的に支える建築技術者集団、町並みを舞台にしたイベントを主催する団体、伝統祭事を維持する団体、町並みや伝統工芸などの地域の文化を説明

するボランティアガイドの会、これら団体とその構成員に多彩な人材がいて、またそのような人材を育成する人づくりにも取り組んでいることが、八女福島のまちづくりの特徴である。

まとめ

八女市福島では多彩な人材によるいくつものまちづくり団体が存在し、ネットワークを築いて協力しながら町並みとコミュニティを維持している。それら団体の活動を行政がバックアップするパートナーシップも築かれて、町並み景観が維持されている。

(2)八女市黒木の景観とまちづくり

八女市には合併する前の平成 21 年(2009)に重伝建地区に選定された在郷町の黒木地区がある。福島に比較し町並み整備が始まって間がないこともあり、観光に訪れる客は少ない。まちづくりが停滞している要因を把握するために黒木の景観の特徴とまちづくり活動についてまとめた。

町並みの景観構成

黒木の歴史的景観は、東西に走る旧往還道と大正期に道路ができた現 442 号線と、それらと並行して北側と南側を走る 2 本の通り、及び町家の裏を東西に流れる中井手用水と黒木廻水路の 2 本の水路が骨格をなしている。地区の東端には国指定天然記念物の大藤を擁する素盞鳴神社が、西端には県指定天然記念物の大楠を擁する津江神社があり緑豊かな空間を造っている。景観を構成する要素としては、旧往還道沿いの町家の伝統家屋や寺社、水路の石積み護岸や石橋、洗い場などの工作物、敷地裏の小径に沿って置かれている石祠や地蔵、裏通りの生垣や庭園など、多彩なものが挙げられる。また、町並みの背景をなす山々の樹木も、町並みの個性を際立たせる重要な景観である。

まちづくり団体

黒木のまちづくり団体は、伝建制度による町並み整備に関わる「町並み保存会」しか存在せず、福島のようなまちづくりを推進する各種団体は存在しない。町並み整備は行政主導となっている。しかし、町内会や隣組の結びつきは強く、組単位で「川祭」が実施されている。また、素盞鳴神社や津江神社の祭は氏子組織により継承されている。

観光客の属性と動向

黒木を訪れる日常の観光客が少ない中で、町並みがどのように観光客に認識されているかを把握するために、黒木最大の祭である「大藤祭」開催時の平成 25 年 4 月 21 日に観光客を対象にアンケート調査を実施した。大藤祭りは素盞鳴神社の藤の開花に合わせ開始される祭りであり毎年約 15 万の観光客が訪れる。アンケート票は 150 票を配布し回収した。

観光客の属性

観光客の発地は、八女市内、筑後地方を含めると 78% となり、近くから客が訪れている。福岡市内からも 12% いるが、県外から訪れている人は少ない。年代は 50 代と 60 代以上が

多く、家族や夫婦で訪れる人が約 8 割を占める。交通手段は公共交通が不便であるため自家用車が 93%と高い割合になっている。滞在時間は 2 時間程度が 49%と最も多く、使用金額は 3 千円までが約半数、5 千円までが約 3 割となっている。花を見て物産店で買い物をして帰る時間と金額だと考えられる。

行動範囲と町並みの認知度

町並みを観光している人は 2 割と少ない。重伝建地区に選定されて日が浅くまだ町並みの魅力を伝える演出と宣伝がなされていない。町並み整備もこれまでに旧往還道沿いの伝統家屋約 10 棟が復原修理されているが、他の水辺空間や裏通りの景観などはまだ未整備で地元への関心も薄い。工作物や樹木が豊富で水辺に近い本来の黒木の景観の良さが活かされていない。観光客に上手に町並みの魅力を伝えるパンフレット作成や町並みガイドの育成などの工夫が必要である。

満足度と再訪意思

訪れての感想はとてもよかった(65%)とまあまあよかった(35%)で 100%となり、藤祭りとしての満足度は高い。是非再訪したいが 78%、訪れるかも知れないが 21%となっている。訪れての満足度が高く、再訪の意志を持つ観光客が多いことから、町並み整備と共に飲食店などの利便施設が整備されれば、観光客の増加は見込めると考える。

まとめ

黒木には町並みや水路などの文化遺産があるにも拘わらず、観光は藤だけで町並みの積極的な宣伝が行われていない。町並み整備に関わる団体は存在するが、町並みを積極的に活かそうとするまちづくり団体が存在せず、空家が増えてきている。町並みが地域の重要な文化資源であり観光資源でもあると認識している住民が少ない。地域のまちづくり意識を高める必要がある。

(3)日田市豆田のまちづくり

天領日田の陣屋町として栄えた日田市豆田町は歴史的建造物が残り、平成 16 年に重伝建地区に選定され、町並みを見学に訪れる観光客で賑わっている。伝建制度を中心とした補助事業により、伝統家屋の修理や電線地中埋設工事が実施され、町並み景観が整備されている。これらの整備が、まちづくりの活性化にどのような影響を与えたかを明らかにした。

豆田の歴史と町並み景観

九州の中央に位置し交通の要衝であった日田は天領として栄え、陣屋膝下の豆田町は幕府の公金を扱う掛屋を中心とした商家町として栄えた。北を筑後川支流の花月川に、南を花月川から取水した城内川に囲まれ、南北に走る上町通りと下町通りの 2 本の大通りとそれを結ぶ数本の横道に商家が並び 10.7ha が重伝建地区に選定されている。城内川から分流した 4 本の水路が横町の通りの並行に西流する。町並みは江戸期建設の平入りの土蔵造町家、明治期の妻入りの土蔵造町家、洋風

の町家、寄せ棟や切り妻の町家など、多彩な伝統家屋により構成されている。

まちづくりの経緯

豆田町は昭和 40 年代までは商業の中心地であったが、昭和 49 年より始まる駅前区画整理により、商業の中心が駅前商店街へ移り町は衰退していった。危機感を持った地元商店会と U ターン者を中心に昭和 50 年頃から地域活性化について検討がなされた。その結果、地域の文化遺産である町並みを活用するしか手立てがないという結論に達し、昭和 54 年に天領時代の西国筋郡代着任行列を再現した「天領祭」を開始し、昭和 57 年には初めて町家を再生した喫茶店が開かれた。同時に重要文化財である旧掛屋の草野本家でも江戸時代の雛人形を公開するイベントが開始された。その後は、江戸時代の著名な儒学者広瀬淡窓の生家を民間運営の資料館として開館するなど、町家の活用が広がり観光客が増加した。町が活性化してくると戦後途絶えていた伝統祭事の祇園祭を復活させようとする運動が興り、昭和 61 年から町内会ごとに徐々に祇園祭が再開された。バスツアーが年間を通して組まれるなど年間約 50 万人の観光客が訪れる観光地へと発展した。

重伝建地区選定以降の町並み整備

これまでに伝建制度により 46 棟の補助事業と街なみ環境整備事業による 20 棟の補助事業が実施された。下町通りと上町通りは電線地中化が実施され、消火栓設備も設置された。これらの事業により最盛期の町並みが徐々に蘇っている。本物の町並みを残すために設計士や大工、左官などの建築技術者で「本物の伝統を残す会」が組織された。この会では技術の伝承にも力を入れている。

市も豆田の町並みは重要な観光資源と位置づけ、観光パンフレットやホームページで宣伝を行い、天領祭や雛祭などのイベントには補助金を出している。旧日田市全体の入り込み客数は平成 12 年を境にバスツアーが少なくなったことにより減少傾向にあるが、豆田を訪れる観光客は平成 20 年頃より横這い或いは微増しており、天領祭だけでも 10 万人を超す客が訪れ、年間約 50 万人が豆田を訪れていると市では推計している。

豆田の業種の変化

重伝建地区になり豆田町の業種にどのような変化があった把握するために現地調査を実施し、平成 15 年の調査結果と比較した。その結果以下のことが分かった。

調査した家屋 224 棟の内、飲食店や小売店などの店舗は 86 棟あり、全体の 38.4%を占め、江戸時代から続く商家町の性格を維持している。

観光に関係している店舗や旅館は 47 棟 21.0%、観光客・地元客向けが 23 棟 8.9%となっており、観光地として成功している豆田らしい業種となっている。

平成 15 年と比較すると非店舗家屋から店舗へ変わったのが 21 棟、逆に店舗から非店

舗へ変わったのが 18 棟となっており、店舗の数が増えている、詳しく見ると伝統家屋を活用した飲食店が 3 棟増加し、菓子店も 2 棟増加している。飲食店も菓子店も観光客を意識して伝統家屋を利用している。

現在空家となっている住宅は、所有者が荷物や仏壇があるから貸したくないという意向で空家となっている。豆田で店舗を開きたいという需要は多いが、空き店舗は、値段で折り合わずそのままの状態となっている。

伝建事業により伝統家屋が修理され、それを活用した店舗が増えている。町並みが整備されたことにより観光客が増え、観光客を意識した店舗が増えている。町並みを観光資源としたまちづくりが地域活性化に貢献している。

一方で、飲食店や酒店や、醤油店などは住民も利用しており、住民の利便性も向上している。

まとめ

豆田では商店会を中心とした住民団体が主体となりまちづくりを進め、行政も積極的に町並み整備や観光客誘致を行っており、観光による地域活性化に一定の成果を上げている。

(4)阿蘇地方の景観とまちづくり

農村景観の維持システムを把握するために、農村景観が観光資源となっている阿蘇地方の調査を行った。南北 24km、東西 18km のカルデラ内に約 5 万人が暮らす阿蘇は、急峻なカルデラ壁の外輪山や現在も噴火を続ける中央火口丘が造り出す特異な地形と、野焼きを行うことで維持されてきた草原が独特の景観を形成している。阿蘇で暮らす人々は古来より草原の草を牛馬の飼料や水田の緑肥、堆肥の原料、草葺き屋根の材料として利用し、冷涼で痩せた土地で巧みに農業を営んで来た。阿蘇の景観は農業を主とした人々の営みが造り上げてきた文化的景観である。対象とした集落は阿蘇谷の湯浦郷、南郷谷の長野と両併である。

集落景観

カルデア内の集落は大きく見ると山裾に線状に、平野部では道路沿いに線状に並ぶが、細かく見ると草の道や農道に面して一定のまとまりが見られる。今回調査した集落は、集落・水田・森林・牧野が大字単位でセットになっていた。

農家住宅の屋敷地の空間構成

阿蘇谷も南郷谷も敷内の家屋配置は同じである。南面する主屋を敷地の北に配置し、牛舎・納屋は土間側である主屋の左手に、つまり西側に置き、主屋の南には作業用の庭（ツボ）を設ける。敷地の奥行きが広ければ、納屋の正面を東に向け主屋と納屋でツボを囲むように L 字型に配置される。奥行きに余裕がなければ南面して主屋の西隣に並んで配置される。湯浦郷ではその割合は約半数ずつであるが、両併・長野では殆どが東面して L 字型に配置される。この様に阿蘇地方の農

家集落の屋敷地の空間構成は、阿蘇谷と南郷谷で違いはなく、他の地方の一般的な農家と同様に、日当たりと作業性を重視した合理的な配置となっており、現在も継承されている。敷地境や道路の脇を流れる水路には洗い場が設けられている。

草原との関わり

畜産農家が少なくなり、また茅葺き家屋もない現在は、採草地や放牧地としての草原との関わりが少なくなっているが、今回調査した集落では牧野組合は大字単位で維持され野焼きも実施されている。その理由としては昔からの習慣だからや安全のため、あるいは美しく整備していきたいからという意見が聞かれた。北外輪山の展望台に牧野を持つ湯浦郷の集落は、観光に利用できることも理由の一つである。

まとめと課題

役畜や牧畜としての牛を飼わなくなり牧野を必要としなくなっても、各集落で野焼きを行い阿蘇地方の景観を特徴付けている牧野を維持している。しかし景観の担い手である農家は後継者不足で野焼きの維持が困難になっている。農業収入以外に生活の糧を得るために民宿を営んでいる農家もあるが、観光に関わる農家は少なく、観光資源である景観の維持を担っている農家が観光の恩恵を受けていない。このままでは阿蘇地方の景観の維持が困難である。農業を維持するためのまちづくりシステムが必要である。

(6)八女市の着地型観光の取組

八女市は前述の福島と黒木の 2 地区の伝建地区以外に、農村景観や伝統工芸などの文化資源が存在する。市では平成 22 年の合併を契機に、旧市町村の垣根を低くし新八女市の愛着心と誇りを醸成すると共に、人口流失により衰退化する地域の活性化を目指して、観光を活用しようとしたことから着地型観光の取組が始まった。観光により地域の魅力を発信し、地域ブランドを高め、交流人口の増加のみならず、移住者を増やすことを目標としている。市内の広域に散らばる資源を活かす着地型観光始めた八女市でのこれまでの取組の経緯を整理し、地域活性化への効果や課題を明らかにした。

八女市の着地型観光の取組は、地域への誇りを高めるために、まずは市内の地域資源を市民に知ってもらうことから始められている。地域資源にはモノだけでなく人も含めており、人材発掘と人材育成が最初からアクションプランに入っている。観光コーディネーターの必要性も最初から認識され、早い時期に配置されている。市の外郭団体が観光業を取得することにより、観光地域づくりプラットフォームとなっている。

八女市の自然や伝統的町並み、伝統工芸や手仕事、農産物や加工品を活かした着地型観光は、ここでしか経験できない本物を体験することができ、客の満足度が高くリピーターも多い。体験内容とともに地元住民と交流で

きることも満足度を高くしている。地域資源を広く宣伝し、八女ファンを増やす効果を果たしている。八女市での取組は現存する地域資源を、それに関わっている人を上手に介在させて客とのコミュニケーションをとりながら魅力的に演習している。

体験プログラムは必ず現地で実施され、その場の雰囲気や周辺の風景も含め五感で体験できる。その場所へ魅力を感じ移住を決心した人もいる、まだその数は少ないが、地域活性化に貢献している。

八女市での観光活動は経済活性化は勿論であるが、人も含めた地域資源をいかに輝かせて八女市のブランド力を高め、交流人口や転入者を増やすかに重きが置かれている。

消えかかっていた伝統文化が、体験参加者からの評価により誇りと自信を回復している。知名度が上がれば維持されることにつながる。観光が伝統文化の継承に貢献できる可能性を見いだすことができる。

課題としては先ず宣伝方法があげられる。口コミで観光情報が広がってはいるが、県外からの参加者は少ない。県外へ、更に海外へも八女の魅力を伝える宣伝方法を開発する必要がある。インバウンド観光の手応えは掴んでいるが、まだ準備不足で、外国語のホームページやパンフレットもない。観光案内所のスタッフは必要性は充分認識しており、今後改善されていくと考えられる。次に男性の参加者が少ないことがあげられる。男性が魅力を感じる体験内容や、仕事を持つ世代も参加しやすい日程を組む等の検討が必要である。

以上のような着地型観光が実施できているのは、市が観光地域づくりプラットフォームの運営資金を負担しているからである。プラットフォームが経済的にも独立した存在であることは重要だが、八女市のように地域活性化と伝統文化の維持継承のために、公金で負担するケースも一つのモデルと考える。

(7)結論と今後の課題

伝建地区等の国の制度で維持されている町並みは、景観は補助事業で整備され、かつての輝きを取り戻しているが、地元住民によるまちづくり団体がないと活性化が困難である。日田市豆田や八女市福島は住民団体が存在し観光によるまちづくりが一定の成果を上げている。テーマパークと異なる本物の町並みを維持することで、他地域とは異なる個性的な町並みの魅力が観光客を惹きつけ一過性の観光地とはなっていない。そこで生活する人との交流がリピーターを生み、持続的な観光へとつながっている。黒木では町並み整備を開始して日が浅いこともあるが、まちづくりを積極的に牽引する住民団体が存在せず、町並みを訪れる観光客が少なく活性化に至っていない。観光客をもてなそうとする意識がまだ住民に育っていない。

八女市では、市域全体を対象とした着地型観光が実施され、伝建地区以外の農村景観や

伝統工芸も観光資源とした取組が人気となっている。農業や伝統工芸の従事者が誇りと自信を散り戻し、副収入を得ることとなり、職業の維持につながる。地域の意志が反映される着地型観光は景観(文化遺産)を保全した持続的な観光まちづくりに有効であり、それを実現するためには観光地域づくりをコーディネートするプラットフォームの存在が必要である。

町並みは重伝建制度や街なみ環境整備事業などにより整備する制度があるが、農村景観に関しては農地を維持する補助がなく、耕作放棄されれば農村景観の維持は困難である。文化的景観でも、農地の維持に補助をするわけではないので、農家の存続が課題である。EUのように原産名称保護制度による農産地の保護や品質の保証による農家への奨励が必要である。同時に農業以外に副収入を得るための農家民宿や教育農場の運営など、観光が農業に果たす役割について今後研究を進めていく必要がある。

参考文献

- 観光庁(2015)「観光地域づくり事例集2015」
http://www.mlit.go.jp/kankocho/news04_000112.html、(2015年7月5日入手)
- 尾家建生・金井満造(2008)「これでわかる着地型観光 地域が主役のツーリズム」、学芸出版。
- 春田直紀(2011)「第4章多層的共同体と景観の歴史—阿蘇湯浦からの考察」『東アジア内海文化圏の景観史と環境第2巻景観の大変容—新石器化と現代化』昭和堂
- 吉村豊雄・春田直紀編(2013)「阿蘇カルデラの地域社会と宗教」清文堂

5. 主な発表論文等

- 〔雑誌論文〕(計 1件)
- 大森洋子、別所匠、「阿蘇カルデラ内に立地する農村集落の屋敷地の空間構成に関する研究」、日本建築学会九州支部研究報告No.53、pp.253-256、2014年、査読無し
- 〔学会発表〕(計 2件)
- 大森洋子、「八女市の着地型観光の取り組みに関する研究」、日本建築学会2016年度大会学術講演会(8月24日発表予定)、福岡大学、2016年
- Yoko Omori,「Conservation of Historical Townscape in Japan」, Festival Budaya Kotagede 2014 DIALOG BUDAYA, Indonesia, 2014
- 〔その他〕
- ホームページ等
<http://www.geocities.jp/omoriar/omoriyokoken/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

大森 洋子 (OMORI, Yoko)
久留米工業大学・工学部・教授
研究者番号：30290828